

日本人にとって、ペルーはどのような国なのか

株丹 達也

答は人により様々であるだろう。マチュピチュやクスコに代表されるインカ文明の国、「コンドルは飛んでいく」が流れるアンデス高地でリャマやアルパカが草を食べているシーンを思い浮かべるといった答が多いかもしれない。私にとっての、ペルーの景色としておきは、現在の住まいから歩いていける範囲の中にある。15分かけずに海岸線を望む高台の上に出ると、そこから波と遊ぶサーファーやパラセイルを楽しむ人を見ることが出来る。900万人近い大都市の非日常的な日常！

経済関係の方でペルーをよく知っているとなれば、はっきりとした答になるだろう。ペルーは、世界有数の資源国であり、とりわけ銅、亜鉛、鉛、銀、スズの生産が多い(2014年の生産量でいずれも世界第3位。金は6位)。埋蔵量も豊富であり、カントリーリスクが低く、今後の日本にとり、その重要性は増す

ことはあれど減少することはない。

ペルー経済の特徴

日本との関係に限定せず、ペルー経済の特徴を見てみると、中南米でも有数の高成長と低インフレを同時に実現してきたことがまず上げられる。2014年までの過去10年間の平均経済成長率は6.2%。一方で、インフレ率は平均2.87%(過去10年)である。財政運営も堅実で、外貨準備高の確保にも十分な注意が払われている。こうした努力は、大手格付け会社の高評価(ラテンアメリカの国の中ではチリに次ぐ2位(メキシコと同格))として目に見えるものとなっている。

太平洋同盟は政治的な色彩が薄く、経済に力点が明確に置かれた組織である。極めて注目度は高い。ペルーは地理的にも太平洋同盟の中央近くに位置するだけでなく、早くから二国間の経済連携に取り組んでおり、貿易総額の95%超を

FTA 提携国との貿易で占めている「FTA 先進国」である。自由で開放型の経済を目指す太平洋同盟に相応しい国である。

また来年2016年には、APEC 首脳会議及び関係閣僚会議はペルーで開催される(ペルーで前回開催されたのは2008年のこと。当時の麻生太郎総理とアラン・ガルシア大統領による首脳会議等も行われた)。TPP 交渉参加国の一つでもある。

こうしたペルーが今後の日本にとってさらに重要な国に成長していくことは確実であるが、そうした事情は、まだまだ日本の経済関係者に広く知られるには至っていない。最近ペルーは日本など東アジアへのアプローチを強めており、投資を呼び込むための政府関係団体が主催するセミナーも今年になって既に2度実施されている。9月のセミナーではベラルデ中銀総裁の講演も行われた。また、APEC だけ



リマの波はワールドクラス。サーフィンが楽しめる



高層ビルがそびえる海岸線でパラセイル

提供：原田慶子（リマ在住フリーライター）

でなく、昨年12月のCOP20、今年10月のIMF 世銀総会など大型の国際会議が連続して開催されるので、日本側要人の往訪を得て、ペルーの実情をより詳しく伝えるなど日本とペルーの一層の経済交流促進を助けることが出来るように努力したい。

日本人、日系人の存在

日本人移住者の歴史、そして今日の日系ペルー人の活躍を抜きにペルーと日本の関係について語ることはできない。1899年4月に、契約移民として日本人790名が佐倉丸でリマ近郊のカヤオ港に上陸したのが、始まりである。その後、紆余曲折をへて、移民は農業よりも都市での商業に適性を見だし、活躍していくことになる。しかし、第二次大戦前後、排日暴動、指導者層のアメリカ合衆国強制収容所への送還、財産の没収等のきわめて厳しい困難を経験した。そして、現在では、ペルーの地でペルー人として生きていく覚悟を決め、努力を続け、ペルー社会に広く受け入れられている。

ペルーに来て、有力な政治家、閣僚などリーダー、また各国の外交団と会って話をすると、必ずと

いってもよいほど、相手方からは、日系コミュニティへの言及がある。そして、そのたびに、日系の皆さんへの評価が極めて高いことを感じた。さらに言えば、その正直、勤勉、規律、時間厳守など己を律する厳しさへのペルー社会の深い尊敬の念が、そのまま日本あるいは日本人への評価につながっているように思えるのである。

私は、日本人の良いところは、組織の中での役職の軽重に拘泥することなく、それぞれが与えられた職分を全うするようひたすら努力するという点に特に現れているのではないかと考えていた。言葉は適切さを欠くかもしれないが、ごく普通の人達がとても立派であって、熱心に自分の仕事に取り組む。たとえば上司があまりたいしたことがなくても、あるいは組織がとても困難な状況におかれても、とにかく求められる水準の仕事をやり遂げる。これが元々の日本人に特徴的なものではないかと考える。ペルーの日系の皆さんは、今や日本国内で廃れつつあるそうした伝統をきちんと受け継いでいるように感じるのだ。

現在、ペルー国内でその活躍が注目されているのが、マリノ・モリカワ氏である。日系ペルー人であり、

日本の国費留学（筑波大学）を経験している。ある時、留学中であつた彼に故郷ペルーから電話がかかってきた。子供の頃に魚釣りをしたり泳いだりして遊んだ湖（カスカホ、リマ市の北方のワラルに近い）が汚染の進行によって、今にも埋め立てされようとしているという知らせだった。いてもたってもいられなくなり、飛行機のチケットを買ってペルーへ。そこから思い出の湖を救うための彼の挑戦が始まった。筑波大学で、ナノ技術を学んでいた彼は、その技術を活用して湖を汚染から救うプランを立てることを考える。成算があったわけではない。しかし、日本の恩師たちの指導を受けながら徐々に具体的な形にしていく。

まずは、ごみの捨て場となった湖からごみを拾い上げる作業にたった一人で取り組んだ。来る日も来る日も朝から晩までゴミ捨て場のような湖に入ってゴミを取り除くことを繰り返す。

ある日、いつもの作業開始の時間に遅れて湖に到着した彼が見たのは、湖の周りの住民達が彼に代わって湖に入り、ゴミを除去しようとしている姿だった。その数およそ百人。映画のシーンにでもなりそう



湖の浄化に取り組むマリノ・モリカワさん



湖に入っの浄化作業

提供：Joe Whilar 氏・Omar Balbin 氏（ペルー写真家）

なそうなことが起こったのだ。モリカワ氏は言う。「ペルーの人たちはやさしい人たちだ。誰かが（正しい方向に）引っ張れば、ついてきてくれる。」

湖をいくつかに分けて、その区画ごとに、水の浄化に取り組んでいった。日本の技術を使って極めて細かい気泡（ナノバブル）を作り、水中に送り込む。さらに極めて細かい有機物や無機物を濾過できる仕組み（バイオフィルター、こちらもナノ技術）に水を通していく。こうした作業によって、カスカホ湖の水は浄化され、ついに、水鳥が戻ってくるまでになった。

モリカワ氏の偉さは、最初はたった一人で全くのボランティアで取り組んでいた作業を、単にボランティアな事業にとどまることなく、経済的にも採算が取れるような仕組み（会社組織の立ち上げ）にまで進めている点にもある。大儲けを狙うというのではない、あくまでも、水の浄化のため、環境を良くしていくことを目的とするが、経済的ないわば梃子を入れることによって、こうした営為が、永く続き、さらにより大きな広がりを持ちうるようにモリカワ氏が考えていると私には思える。

モリカワ氏にはこだわりがある。彼が目指す水質はとても厳しい日本の基準を満たすことである。その目標を環境負荷をかけずに自然の力を最大限発揮できるようにして、水を浄化をする。酸素含有率、有機物、重金属など汚染の状況に応じて最適な技術を組み合わせて、環境を復元しようとしている。さらに、日本で学んだ「もったいない」の精神で、何であれ無駄なく使うことも重視している。ゴミの中には外来有害植物も含まれていた。重

機を使わないと駆除できないほどになっていたが、除去するだけではなく、これを材料に使うコンポストも作っている。コンポストで出来た土には窒素が含まれているので、砂漠の緑化にも活用している。アフリカのチェニジアで汚泥を浄化した際には、その過程で生じた粘土を使って住民が陶芸をすることに出来るようにし、住民は副収入を得られるようになったという。

一旦は死に瀕した故郷の湖を再生して、彼は次々に新しい挑戦を続けている。ペルーは国内各地で環境汚染問題を抱えている。彼の取り組む環境復元への活動は、マスコミ、政治、行政などの多くの人々の注目を集め、期待がかけられている。

日本の持つ高い最新技術を最大限に使うことで、いままで望まれてはいるが、実現できなかった環境浄化を実現してきているモリカワ氏の活躍は、私にとって、大きな喜びである。同時に衝撃でもある。たった一人であっても、持てる力を総動員すれば、想像を超えた成果を上げることが出来ることを証明しているようにも思うからである。

水の浄化という点では、今後は、イカ州のワカチーナ（砂漠の中にあるオアシスという表現がぴったりの湖であり、幻想的な印象を与える場所だが、水質の悪化と水位の低下に苦しめられている）、さらにチチカカ湖にも挑戦しようとしている。

チチカカ湖は、船が運航している湖としては、世界で最も高い地点にあるものだが、汚染が進んでいる。この湖の環境を浄化することは、多くのペルー国民の願いである。しかし、その高度ゆえの寒さ（気温はマイナス15度にもなり、

水温も低い）のため、これまで100以上の多くの環境改善の試みが行われ来たが、まだ成功事例は一つもない。しかし、モリカワ氏は、北海道で実験を行い、自信を持って、この事業に取り組もうとしている。良い結果が得られることを心から期待している。

おわりに

ペルーは一方で順調に経済が成長し、全体としては中進国と呼ぶレベルに達している。他方で、依然として貧富の格差は大きい。地域間の格差も著しく、経済成長の恩恵から取り残された地域がある。貧しい地域、貧しい人々ほど、環境が悪化すると生活の質は確実に悪くなってしまう。生存を脅かされてしまうおそれもある。水資源の地域的な偏在が著しいペルーにとって、その質を元のように良質なものに戻していく努力は極めて重要である。こうした問題についても、日本は、ペルーと協力して取り組んでいきたい。

（かぶたん たつや 在ペルー日本国大使）



『メキシコ料理大全 —家庭料理、伝統料理の調理技術から食材、食文化まで。 本場のレシピ 100』

森山 光司 誠文堂新光社
2015年7月 208頁 2,800円+税 ISBN978-4-416-61582-9

ラテンアメリカの料理では北はメキシコ、南はペルーが美味しい、奥が深いと訪れた多くの人たちが評価するのは、どちらも多様な香辛料や食材を駆使し、先コロンブス期から高度な文明を持っていた歴史的背景があるからかもしれない。

本書では、サルサ（トウガラシその他で作るソース）、アントヒートス（トウモロコシ生地のタコス等の軽食）、スープ、サラダや野菜料理、肉・魚介料理、チョコレートをはじめとするソースのモレ、豆や米、卵料理やいろいろな食材を包みこんだエンパナーダスなどの国民食からデザート、飲み物に至る料理 100 余種の作り方を日本でも再現可能なレシピとカラー写真で紹介している。それとともに、現地の食材、飲料、各地の食習慣、行事や祭り、市場や屋台の様子、調理器具から、日本でのメキシコ料理に使える食材の取り扱い店や食に関するスペイン語に至るまで概説していて、単なるレシピ本ではなく、各地の風土や伝統・文化にも触れてメキシコの魅力を教えてくれる、実に楽しい手引き。

〔桜井 敏浩〕



『ブラジル知的財産法概説』

ヒサオ・アリタ、二宮 正人 大嶽達哉日本語訳監修 信山社
2015年8月 281頁 4,200円+税 ISBN-978-4-7972-8638-0

日本・ブラジル間の経済・文化関係が緊密の度合いを深めるとともに、知的財産をめぐる紛争や提訴も必然的に増えている。本書は、特許権、意匠、商標、技術移転などの工業所有権、著作権法、コンピューター・プログラム保護法、さらには商号、ドメイン名などのインターネット上の権利・義務、植物種苗育成種の育成者権、集積回路の回路配置に関する知的所有権、営業秘密、Trade Dress（商品・商業施設等の視覚的イメージや包装など特定商品・役務の個性の他競合品との差違）の保護に至るまで新しく重要な保護についても取り上げている。

はじめにブラジルでの知的財産権の法的根拠と歴史的経緯を概説し、上記解説の後半分に資料として工業所有権法、著作権法、コンピューター・プログラム保護法の条文訳文、用語例索引も付けてある。意匠・商標登録出願手続きについてはフローチャートもあり、全体としてブラジル進出日本企業にとっては極めて有用な実務解説書となっている。

二宮サンパウロ大学法学部教授は二宮正人法律事務所の代表として法律実務に通曉し、ポルトガル語・日本語での著作、翻訳・通訳に多大な実績を挙げており、アリタ弁護士は元ブラジル国家工業所有権院 (INPI) 長官で二宮事務所のシニア・パートナー。

〔桜井 敏浩〕